



展示報告

東京都復興記念館の展示リニューアル及び同潤会に関する特別展の実施について

姜 明采（非文字資料研究センター 研究員）

1. はじめに

東京都復興記念館（東京都墨田区横網 2-3-25 横網町公園、以下、「復興記念館」と略称す）は、関東大震災で最も多くの被害が発生した被服廠跡に建てられた貴重な展示施設である。次の世代に震災の恐ろしさを伝えるためその建設費、展示資料すべてを寄付で賄っており、みんなの力で誕生した施設といえる。

筆者は建築史の観点から復興記念館をはじめ同敷地内の震災記念建造物を研究してきたが、2021年、管理団体である（公財）東京都慰霊協会から「関東大震災100年事業として1階の展示コーナーを整備したい」との相談を受けた。そこで、2022年より建築学部内田・姜研究室の受託研究として復興記念館1階復興コーナーのリニューアル作業全般を担当し、模型・古写真・現物資料等を用いて展示スペースを整備した。本稿は、非文字資料を用いた活動として、復興記念館の展示リニューアルの全体像を紹介するとともに、本展示に伴い実施した同潤会の特別展についてご紹介したい。

2. 復興記念館の展示リニューアルについて

復興記念館は、震災記念堂（1930（昭和5）年竣工、現東京都慰霊堂）に与えられた展示の機能を独立させて翌1931（昭和6）年に建てられた。竣工当初から関東大震災に関する展示を行ってきたが、戦後2階に戦災及び企画展示コーナーを加えて現在に至る。

これまで館内の展示は説明パネルに現物資料とキャプションを配置しており、とりわけ、1階の展示は被害と救援・救護コーナーに比重を置いて震災の恐ろしさを伝

えていた。また、中央ホールはイベント会場として使用されたものの、通常は来館者が通るだけの空間となっていた。そこで、1階震災コーナーにおける展示スペースの有効活用及び観覧動線の整備のため、中央ホールに展示壁を加えた。また、具体的な展示内容としては、既存の構成を基本としながら震災写真マップ、作文朗読・映像展示コーナーなどビジュアル展示を増やし、現在の東京のまちなみの根幹となった復興事業の全容をよりわかりやすく伝えるため復興コーナーの展示スペースを拡大した。

3. 復興コーナーの見どころ

震災で焦土と化した東京は西洋の都市計画を参考にしながら急速に整備されていき、1930（昭和5）年の帝都復興祭を機に震災からの復興を宣言した。こうした短時間での整備は国内外の注目を受けたものの、東京大空襲や老朽化等により現在その痕跡は殆ど残っていない。そこで、既存の構成を基本としながら新規パネルと模型、古写真等の資料を加え、復興コーナーの展示を強化した。

まず、復興事業の全体像を示すため、被災から復興までを時系列で示した「都市復興プロジェクト」（壁掛け式地形模型）を製作した。ちなみに、低所得者が多かった東京西部のまちなみは殆ど木造家屋であったが、震災後の区画整理事業により整備され、耐震耐火の鉄筋コンクリート構造で当時流行した洋風デザインを具現した建物が登場していった。このことから、震災後に整備されたまちなみの様子を効果的に伝えるエリアとして現在の江東区深川エリアを選定し、東京の復興が宣言され

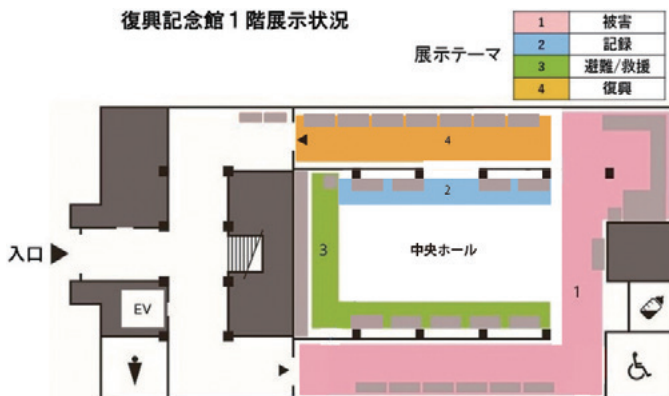


図1 展示リニューアル前



図2 展示リニューアル後¹



図3 整備した復興コーナー

た1930（昭和5）年の地図をもとに敷地模型を製作した。模型の上には、古地図・古写真を用いて震災前・震災で被災したまちなみの様子と復興事業の様相を投影させている。

このほか、現在の住まいの原型をいち早く提案した同潤会の住宅事業や、鉄筋コンクリート構造に電気、ガス等の最新設備を備え、子ども主体教育のため特別教室を充実化した復興小学校、米騒動をきっかけに本格化された震災前から引き続き生活を支えた社会施設など、復興事業による「人々の生活」の変化を表現した。また、復興事業に尽力した人物、区画整理事業によるまちなみの整備、復興事業で架け替えられた隅田川の橋梁、衛生のため整備された上水道、震災復興の様子を記念するため1929（昭和4）年に開催された帝都復興展覧会といった事業内容を説明パネルやキャプションで示した。

なお、横網町公園に建てられた震災記念建造物は、建設費や公園内樹木などすべてを寄付で賄い、そのデザインも人々の要望を踏まえたものであったこと、現在も当初の機能を維持している公共の慰霊空間であることを示した。



図4 同潤会分譲住宅模型

4. 特別展：同潤会がめざした理想的な住まいと住環境

上記リニューアルに際し、2023（令和5）年5月2日から8月27日まで復興記念館2階企画コーナーにて、震災復興による住まいの変化を伝えるため同潤会の特別展を実施した。

同潤会は、関東大震災後の快適な住宅づくりを目指し、1924（大正13）年に国内外の義捐金1,000万円で誕生した内務省の外郭団体であった。罹災者用仮住宅の供給をはじめ、新しい都市型住宅としての「アパートメント・ハウス」、郊外に暮らし、都心で働く人を対象とした「分譲住宅」の供給まで、震災後における住まいの変化を牽引したのである。特別展では説明パネルで事業概要をまとめるとともに、内田・姜研究室で製作した同潤会分譲住宅の模型（外観・内部の計2基）を展示し、同潤会の先進的な住宅プランを紹介した。

本特別展は神奈川新聞で紹介されるなど好評を受け、会期後の9月1日～22日に横浜キャンパス3号館企画展示室で展示された。展示の際は、特別展のパネル及び青焼き図面等の現物資料に加え、震災で被害を受けた横浜の写真資料等も配置した。11月21日～12月15日にはみなとみらいキャンパス1階展示コーナーでパネル展示を行った。

5. 終わりに

関東大震災100年を迎え、様々な施設で関連イベントが行われた。復興記念館でも2023（令和5）年9月1日にリニューアルオープンしてから1,000名以上の来館者が訪問するほど関心が高まっているが、1階の常設展及び同潤会の特別展を通して「人々の生活を支えながら進められた関東大震災の復興」についてご理解いただき、これからの災害時における復興のあり方についても一考していただければ幸いである。

【注】

1（公財）東京都慰霊協会 HP、<https://tokyoireikyokai.or.jp/news/20230927.html>（2023.10.30閲覧）



図5 同潤会アパートメント・ハウスの青焼き図面